



ながらへて炬燵仏になりてをり
 山姥の洗濯日なり木の葉浴ぶ
 水が水連れて動くや去年今年
 星の入東風漁り船点滅す
 十二月眸の落ちさうな深海魚
 雪山の日暮れを花と思ひけり
 伐採の罅は四方に冬泉
 恵方とや辺野古につづく獣みち
 蛇捕りを祖にいただき飾売る
 馬糞過ぐ美髯の御者と鈴の音と
 魚の腹割くやこぼるる冬銀河
 一里一尺土人形に心意気
 湖底へ冬日斜めに魂だまり
 鳥声に微かな粘り明日は雪
 御在所岳や春の初めの鬩多し
 *
 円城寺 龍
 佐藤映二
 矢島 惠
 川村五子
 西牧千恵子
 小熊里利
 名取朋子
 渡嘉敷皓駄
 丸山靖子
 古畑恒雄
 玉木愛子
 酒井和子
 藤本光子
 牧野きよ子
 増田義幸

木曾馬も男も枯れてゆく中に
 元朝や頬瘦けてこそ翁面
 自転車に油さしゐる年初め
 根雪以後暮らしの歩幅狭めゆく
 一竿は鮫の鉄干し年の市
 北狐耳より動き目の合ひぬ
 天狼よ我が胸うちの熾し火よ
 生と死の間透けゆく霜の声
 寒鯉や喉の奥なる小宇宙
 凍鶴の絞りきつたる暮色かな
 初茜ランランランと英単語
 詠まむとて焼芋ばかり食べてをり
 温もれる糶殻灰や去年今年
 一重こそ茶花のこころ山茶花よ
 冬晴や柳行李に柔道着
 篠遠良子
 橋本幸篤
 伊藤由希子
 米山節子
 垣内みか
 許勢元貞
 志摩晴樹
 渡辺秀雄
 岩崎桂三
 鎌田文子
 曦 達久
 安田三千代
 千田幸子
 寺地和子
 名取美智

岳俳句・拓くことば 三月

(451)

宮坂 静生

はじめに

風景句のすずめ。絵はがきのような風景句を詠めというのではない。自分の見方で風景を詠う。自分の主観にたよって観念句ばかりを作っているのは早晩、詠うことがなくなる。行き詰まる。俳句ができないときは、関心のある風景を詠え。風景を見つめることは、自分を見つめることと同じ。風景の発見ができない俳人は足腰が貧弱だ。

みちのくの炬燵仏

ながらへて炬燵仏になりてをり 円城寺 龍

冬は炬燵に入り切り。炬燵蒲団の上に頸を載せ、目ばかりきよろきよろさせ、ときにうとうと目を閉じる。食卓に立つのも面倒。腰の根に盆に載せた食物や湯茶を供物のようにはこぼせる。自称、これ「炬燵仏」。このまゝ、ころりと御陀仏になれば天下泰平であるが、春になれば、炬燵仏も欲が百出。どうしてこれ百歳まで達者。只者ではない。

山姥の洗濯日なり木の葉浴ぶ 佐藤 映二

「山姥の洗濯日」という伝承か俚言のようなものがあるのか。裸同然の素寒貧の山姥が晩秋の木の葉を浴びている姿を

か。ことしもぎりぎりという意識の拡散状況が私にはおもしろかった。余分なことが気になるものだ。

雪山の日暮れを花と思ひけり 小熊 里利

雪を冠った山に囲まれた暮しの中から生まれた嘆息である。感嘆だけではない。雪と闘い、雪と親和した果に「美しい」との吐息だ。まもなく闇に閉ざされる。雪山自身が放つ光芒で山が鈍く潤んだときの慈愛に満ちた山容は「花」というほかない。こゝに浄土があると思うものだ。佳句と思う。

伐採の罅は四方に冬泉 名取 朋子

大きな冬の泉に「かんかん、ばさっ」ととどろく伐採の

今月の秀句

馬橋過ぐ美髯の御者と鈴の音と 古畑 恒雄

北欧あたりの伝承の物語を連想させる。猥雑な現代の話ではない。どこか神話風でもある。よき時代の炉辺談話の風情。少年の日から作者の心の中に蔵された憧憬の物語かもしれない。だれでも一篇の物語を持っている。新旧を超えたロマン。馬橋・美髯の御者・鈴の音。どれもなつかしい。映画「ローマの休日」、戯曲『アルトハイデルベルク』など、思いつくまゝ、馬の鈴の音に誘われて夢想した。

想像するのは古の世を思わせ、愉しいではないか。山姥が着たきり雀なおかしい。民話風の俳句は未開拓の領域か。

水が水連れて動くや去年今年 矢島 惠

川の流れて去年今年を思う。虚子詠の貫く棒のごときという時間詠と同じ発想である。年が改まる感慨はどんなに時間を経ても太古と同じ。孔子の行く水詠は名高い。幾分の新しみは「水が水連れて」と微細な視点にある。川とか湖とか海と総括したい方ではないのが現代風の呼吸であろう。

星の入東風漁り船点滅す 川村 五子

「星の入東風」は陰暦十月中旬に吹く冬の北東風。瀬戸内の漁師や船頭の用いる古くからの地貌季語。昴星(牡牛座の六連星)の出入りにより天気が変わるといふ。夕方の沖合の光景か。漁りを急いでいる様子がわかる。

十二月眸の落ちさうな深海魚 西牧千恵子

深海に生棲する魚は太陽光線への反応を必要としないだけに眼が退化する。それを「眸の落ちさうな」と捉えたものか。なぜ十二月を配したのか。歳月の押し詰った師走にふと水族館の水槽などに飼育されている深海魚に目を留めたもの

罅。単純明快な山の冬の構図に惹かれた。山と泉とが罅を互に増幅しているようだ。探求心旺盛な作者の気持が伝わる。

恵方とや辺野古につづく獣みち 渡嘉敷皓駄

沖縄県那覇在住の作者。「恵方」も「獣みち」も一句では重層的なびびきを持つ。本来の意味の上に、沖縄の直面している現代のきびしい状況が祈りのように重なっている。本土に住むわれわれにとって、沖縄の基地問題は所詮他人事、対岸の火事くらいに思っていないか。沖縄人のことばの熱さ、深さには生きる嘆きが沈々とこもっているようだ。

蛇捕りを祖にいただけ飾売る 丸山 靖子

おかしみを評価。蝮捕りもつばらの蛇捕りであろうが、山国ではいゝ加減な暮しの山人をも「蛇捕り」と呼ぶ。いまは正月前で飾売りを仕事にしているが、どこか山師風情。そこに関心を持ったところ、私は作者の幅の広さ、余裕を感じ。土俗的な発想が光る。

魚の腹割くやこぼるる冬銀河 玉木 愛子

冬の銀河の下で魚の調理をした。その一事をイメージが一つ一つしっかりと定着するように表現し、工夫がある。ことばに生きる俳人の熱意がそこにもっている。あたかも魚の腹から冬銀河の星々がこぼれ出すかのよう。

一里一尺土人形に心意気 酒井 和子

日は一粒枯桑きりと身をしばり 昭和40年

「龍膽」(百十二号・昭和四十年四月号) 特別作品「雪の御牧ヶ原」。小諸に在住した四年間、千曲川を渡り、大久保集落を経て背後の広大な台地御牧ヶ原が句作の場だった。官牧望月の牧だ。満州移民の修練道場があり、戦後は農業伝習所、さらに長野県農業高等学園と変わる。小諸在住の俳人小林秀子さんの夫が学園長。農場を自由に歩かせて貰った。一望の括られた枯桑。空に凍った豆粒の日がある。「凍豆腐から骨の音をたて」も同時作。辛抱辛抱と吹き震えていた。句集『雹』所収。

石壁「LOVE IS ART」夕虹濃し 昭和40年

「龍膽」(百十四号・昭和四十年十月号) 特別作品「草雲雀」。礫山館詠。石壁に刻まれている「愛は芸術なり」に心動かされた。芸術は愛なら当然。絶作裸婦像「女」に礫山は全生命を打ち込んだという。その情熱のことは愛云々。モデルは相馬黒光ではないが、礫山の恋慕は黒光。礫山館全体が芸術愛の館だ。折から臘脂の夕虹が懸っていた。句集『雹』所収。

紫苑刈る浅間の雲の中に入り 昭和40年

「龍膽」(百十四号・昭和四十年十月号) 特別作品「草雲雀」。「南瓜蔓裏返されて水工事」も同時作。小諸の菱野温泉、浅間山麓薬師館での句会詠。晩秋、紫苑の藪を刈っていた。晴れてはいたが雲が多い日で、時折霧が出て、雲霧が顔を掠める。仙人の遊びのような感じ。浅間山の煙は群馬寄りに流れるが、火山の雲は夢を齎すものだ。句集『雹』所収。

漬菜踏む赤子の首のくらくらと 昭和40年

「龍膽」(百十五号・昭和四十年十一月号)。
野沢菜を四斗樽へ漬けた。冬の間食べるために。夕方漬け込み、樽へ押し蓋をした上から新しい草履を履いて踏んだ。こんぼ子(赤子のこと)を背中に負いながら踏む女衆もいた。眠りこけた子の首をぐらぐらさせながらさゆきゅと踏んだ。十一月末は急に冷え込む。尿意をもよおしても我慢して踏んだから、いくらか垂らすこともあったか。そんな年は漬菜の味がよかった。句集『雹』所収。

北信地域の地貌詠。雪深い北信濃の地では北へ一里進むにつれ、雪は一尺深くなるという。信州中野の土人形づくりに托す山人の暮しの迫力を「心意気」と捉えた。侍は侍の、草履取は草履取の、百姓は百姓の気合がデフォルメされて形象化されている。雪深い間の作り手の鬱屈した思いの昇華である。

湖底へ冬日斜めに魂だまり 藤本 光子

湖底を魂だまりという着想に注目した。山に沈む冬の斜陽が湖底へとどく。そんなわずかな時間に、湖底が赤らみ、魂たちがよるこびの声をあげる。そんな幻想を抱かせる。作者が居住する妙高の地はナウマン象の発掘で名高い野尻湖に近い。そんな湖底を連想すると、魂は太古からの生き物の靈魂を思わせる。地貌をしっかりと見つけた句と思う。

鳥声に微かな粘り明日は雪 牧野きよ子

雪になる前に鳥の鳴き声に粘りがあるとは立派な発見である。そんな些細なと思われれることに気付き、一句に記す。それこそが俳句作りの仕事。井波在住の作者は長年の作句の中でしばしばよく気付いている。貴重な自然の観察者だ。

御在所岳や春の初めの鬘多し 増田 義幸

御在所岳の山巒の美しいのが春の初め。私も同様のことを日本アルプスを眺める日々の中で気付いている。あざやかな山巒を見て、かくも自然の彫師は巧者かと感嘆する日がある。

雲形に雪形、風の形、木の形、山の形。四季の移ろいが見事に型に表出される。素朴さを捉える眼を大事にする作者。

次に雪嶺集、前山集から推薦候補作を掲げる。

北風や鳥のむさぼる骨の髄	中里 結
夜更かしを宥めるやうに雪の積む	米山 節子
青霧や廈門の鳥となりたきを	吉澤 清
遠火事や声の荒ぶる旋盤工	渡邊 樹音
顔見世や川にとどまる灯のあまた	大和 悦子

翁面の勁さ——改めて見つめ直すこと

元朝や頬瘦けてこそ翁面 橋本 幸篤

新しい年を迎えた。座敷の床の壁にある翁面に対した感慨である。「頬瘦けて」という、若々しい豊頬とは反対の貧相にこそ、翁面の核心があると改めて感銘した。枯淡、閑寂な境地への憧れは珍しくはないが、剛健な心やさしい作者だけに、求めているもの的大いさ、深さに注目した。

自転車に油さしゐる年初め 伊藤由希子

暮しの中の素朴、簡素なものを大切にしている心が尊い。私も長い間、自転車を愛用した。自分の力でペダルを漕いで体を動かす。機械といってもいたって簡単な車体だ。愛用の自転車の齒車に油をさす。それが年初め。秋田でも自転車を通勤

や暮しに愛用している人が多いのであろうか。地貌が見える。若々しい。

根雪以後暮らしの歩幅狭めゆく 米山 節子

雪が積れば溶けない。積雪のため、地が見えるのは道幅のみ。越後の山沿い暮しが一読してぱっと拡がる。地に張りつくようにして暮している作者の芯の勁さが風土の骨相をよく捉え、読み手の心にひびく。俳句詩型の持つつよみをよく生かすのが巧み。

一桁は鮫の鉄干し年の市 垣内 みか

宇和島の郷土料理を魚屋の二階で馳走になった。そのときに出されたのが鮫。酢味噌和であったか、いつまでも印象があざやか。さめと聞いてびっくり。「鉄干し」とはどんなものか。黒々と干し上げたものか。地の年の市に出されているのがゆかしい。大年から正月料理に加えられるしきたりか。鄙びた地貌に教えられ、うれしいことだ。四万十在住の作者。

北狐耳より動き目の合ひぬ 許勢 元貞

北海道詠。耳が見え、ピピピと音に反応し、伸び上がった狐と目が合った。それだけであるが、道にまで出てきた北狐の姿が見える。北狐の例句も次第に殖えてきた。

天狼よ我が胸うちの熾し火よ 志摩 晴樹

天狼星(大犬座のα星シリウス)への賛歌。わが青春の星、

ランランランと十七歳の登場

初茜ランランランと英単語 職 達久

静岡から新投句の十七歳高校生。元朝の茜空に向い、英単語を調子よく暗記する。軽くはずんだリズムがおかしさを誘う。単語はこんなに好調子におぼえられるものではないが、年のはじめだけに願いをこめたもの。世の俳誌から「岳」を選んで入会。俳句に打ち込みたいという。堂々たるもの。粘りびよく続けてほしい。

詠まむとて焼芋ばかり食べてをり 安田三千代

今月の秀句

木曾馬も男も枯れてゆく中に 篠遠 良子

芯の勁い句だ。木曾と馬を同列に「枯れてゆく」という一点から現今の生き方の核心を衝いた表現に感銘した。世はしたたかで軽薄。乱世である。小形ではあるが俊敏な木曾馬、それに対比される堅実で剛毅な男が世の中から退潮しつつある。二十代から若手の代表格であった作者も中年を迎えた。体験に添いながら一世への感慨をまとめ上げた作。佳句である。本年度の「俳壇」賞は逸したが傑作と思う。

いまも尚というのである。天狼を思うたびにわが身がはげまされるとはなんと初々しい心の持ち主か。一度、私もこんな出発の句を創ってみたかった。だれもがそんな気に誘われる。佳句と思う。大器と期待している作者に、一見古風であるがロマン溢れた太々した句が誕生した。この「一見古風」なところが、多くの人の心にひびく共鳴箱になっている。

生と死の間透けゆく霜の声 渡辺 秀雄

「生と死の間」を意識するとは体調が十分でないのか。霜の声を聞くのも鋭すぎまされた状態を想像する。只寒さだけではない。天来の声のような、聞こえる者にだけ聞くことができる声だ。沈着な作である。

寒鯉や喉の奥なる小宇宙 岩崎 桂三

喉の奥云々は寒鯉とも私も受けとれる。「や」を強調ではなく切れとみるならば後者。寒鯉の凝然と、ときにあぎとうさまからわが喉の奥の暗さを小宇宙と見立てたものか。ふしぎな体腔を捉えた作として注目した。本誌新登場の作者。

凍鶴の絞りきつたる暮色かな 鎌田 文子

「絞りきつたる」は凍鶴の絶叫に近い鶴唳をさしたもので。こゝで軽く切れを入れ、暮色へつゞく。私も南の出水の日暮に立ちつくし、夕鶴の群を見たことがある。その騒々しさは鶴の姿からは想像できない。掲句は数少ない鶴唳であろう。句の容姿、風格がある。そこに作者の姿勢も窺える。

おしとやかな作者だけに焼芋に対する生真面目さがおかしい。一テンポ遅く、世の中をずらして見るところがユニーク。

温もれる初穀灰や去年今年 千田 幸子

農家の初焼きの後か、囲炉裏の灰か。ぬくとさを捉え、年をまたぐ季語のはたらきが的確におさえられている。

一重こそ茶花のこころ山茶花よ 寺地 和子

茶道の世界では当然のことであろうが、きちんと一句にまとめたことで、山茶花への親近感がぐっと増すようだ。

冬晴や柳行李に柔道着 名取 美智

かつて学生時代に着た柔道着を出し、身辺整理をしたものか。きちんと整理されている柳行李のなつかしさ。晴曇にとられないで作句継続はまことに力。がんばりやの作者。他に岳集から推薦候補作を掲げる。

数へ日の過ぎてしまへばのつべらぼう 木幡 テイ

法螺貝や一里一尺つの雪 吉澤 利枝

松本へ寒九の水を飲みに行く 佐藤 光子

聖夜には抱衣の匂ひのなかりけり 長尾裕美子

数の子や我は大きな哺乳類 西村 美枝

湯たんぼや寢床はどこか宇宙船 樋上 照男

鹿食免地震止むことを祈りたり 小原真理子